

国語教育相談室

小学校
no.
83

光村図書

特集

昔話を聞いて楽しもう

わたしと
まことば

自分を愛する
大宮エリー

デジタル

挿絵を拡大して
読みを深める

国語
指導

「分からない」って言うおう！

書写

書写指導は、
ねらいを絞って

2015, いっしょに
はじめませんか。
これからの学び。



学びの限らない未来をひらく。光村図書のデジタル教科書。

CoNETSビューア採用!!

平成27年度版小学校教科書準拠 指導者用デジタル教科書

発売予定



光村「国語 デジタル教科書」
光村「書写 デジタル教科書」
光村「社会 デジタル教科書」
光村「せいかつ デジタル教科書」

学習者用
デジタル
教科書も
発売予定



詳しくは、特設サイトをご覧ください。

平成27年度版 光村図書デジタル教科書のご案内

検索



現行教材は、www.mitsumura-tosho.co.jp/digital/ からご覧になれます。



光村図書

小学校 国語教育相談室 通巻No.161 2014(平成26)年9月12日発行

発行人=常田 寛 発行所=光村図書出版株式会社 東京都品川区上大崎 2-19-9 〒141-8675 電話 03-3493-2111

www.mitsumura-tosho.co.jp E-mail:koho@mitsumura-tosho.co.jp 印刷所=協和オフセット印刷株式会社 デザイン=mg-okada

個人情報の取り扱いに関しては、弊社「個人情報保護方針」に則り、適切な管理・保護に努めてまいります。
詳しくは、光村図書ウェブサイトをご覧ください。 www.mitsumura-tosho.co.jp 広報誌の配送停止をご希望の方は、光村図書出版までご連絡ください。

自分を愛する

自分を愛する、と書くと、なんだか自己啓発とか宗教みたいになってしまうのが怖いのですが、全然そうではないのです。自分を愛する、というのはですね、知人に言われたことで、そういう発想がなかったので、ガーンときてしまったのです。

正確に言うと、言われた言葉は「自分のことを愛していないあなたは人のことなんて愛せない」。もうびつくりしてしまいました。だって、そんなこと学校でも家でも教わらなかったから。世のため人のため、って習ってきたのに、いきなり三十五歳を過ぎて、「自分を愛しなさい」って言われたのですから。

「え？ それってエゴじゃないんですか？ それってわがままじゃないんですか？」と聞き返しました。すると、「わがままとは違う。でも、人に迷惑をかけてもいいから自分を大切にしないといけないときがある。自分の気持ちを一番に考えてあげないといけないときがある」と言われたんです。自分のことを守ってあげられるのは自分しかないのだよと。

なるほどなあと思った訳です。今まで自分のことなんて二の次、三の次にしていたから自分が本当にどうした

いか、どう思っているのか分からなくなってきてはいました。哀しいのか、辛いのか、虚しいのか、寂しいのか。そういう感情をやむやんにしてきたところがあつたなど。そもそも薬学部に入ったのも、父の病気を治したいと思ったから。でも結局向いていなくて、誰かの役に立てなくても自分が楽しいと思える仕事を、と薬学の道を断念し、広告代理店に。言葉の仕事をつけたのです。そしてコピーライターになったのに、今度は会社のため、クライアントのために働きました。そういうものだと思っていたし、そういう側面も正しいのです。

でも、やっぱり、自分を大事にすること、それをおろそかにすると全てがおろそかになる。とはいえ間違っただけじゃないのは、自分を愛することは、人に依存することではないんです。自分の気持ちのよりどころ、はけ口を他者に求めるのではなく、自分の中で完結させることなんです。

森の中を歩いたり、朝の空気を吸ったり、芝生に寝転がったり、花を飾ってみたり、音楽を聴いたり、お風呂にゆっくり入ったり、香りのいいオイルで体をマッサージしたり。自分で自分を癒す。そういうことが、自分を愛することなんだあと、やっと分かってきました。

お金からないし、なんだか自立した感じですよ。なかなかできないけど、それと格闘している日々です。四十歳までにできるようになりたいなと思っています。



撮影：KENTA AMINAKA

1975年、大阪府生まれ。作家・脚本家・映画監督・演出家・CMディレクター・CMプランナー。東京大学薬学部卒業後、広告代理店勤務を経て、2006年に独立。以降、映画の脚本・監督、テレビドラマや舞台の脚本・演出など、多方面で活躍。主な著書に、『生きるコント』『生きるコント2』（文春文庫）、『思いを伝えるということ』（文藝春秋）、絵本『グミとさちこさん』（講談社）など。

CONTENTS

わたしことば 自分を愛する ————— 大宮エリー

特集 02 昔話を聞いて楽しもう

提言1 インタビュー 「聞く」ことで想像力を養う ————— 内田伸子

提言2 語られ、耳で聞かれてきた文芸 ————— 小澤俊夫

実践1 昔話を楽しもう（1年下「まの いい りょうし」）————— 舩元夕子

実践2 みんなで昔話を語ろうよ（5年「雪女」）————— 工藤 豪

昔話の読み聞かせ Q&A ————— 筒井悦子

デジタル教科書を
使いこなそう 1 14 挿絵を拡大して読みを深める ————— 佐藤幸江

子どもたちを
「書写好き」に 3 16 書写指導は、ねらいを絞って ————— 藤井浩治

なるほど国語指導 1 20 「分からない」って言おう！ ————— 作・画／あべかよこ
監修／興水かおり

昔話を聞いて楽しもう

語り継がれてきた民話や昔話を聞いて楽しむ教材「聞いて楽しもう」。耳から入ってくる言葉から物語の世界を想像し、民話や昔話を楽しむことで、どのような力が育まれるのでしょうか。提言や実践紹介、Q & Aを通して探り、指導の工夫についてご紹介します。

インタビュー

「聞く」ことで想像力を養う

お茶の水女子大学 名誉教授
内田伸子

日本語と「聞く」こと

——教科書では、六学年を通して、昔話を聞いて楽しむ教材を位置づけています。

聞くことと想像すること。この二つには、とても重要な関わりがあります。それを説明する前に、まず、日本語の特徴についてお話しします。

実は、日本語は、語を構成する音声の最小単位である「音素」がきわめて少ない言語なんです。ですから、その音素を組み合わせて作られる語も、当然少なくなる。同音異義や異字同訓の言葉が多いことから、それが分かります。「語を作る」という点では、不利な言語といえるでしょうね。

では、私たちは、それをどうやって補っているのか。ここで活躍しているのが、オノマトペ（擬声語・擬態語）です。例えば、犬の鳴き声「ワンワン」を、「犬」という名詞の代わりに使うことがありますね。こんなふうに、オノマトペを名詞・形容詞・

副詞として使い、音・様子などを模して表すことで、足りない部分を補っているのです。豊富なオノマトペをこのように活用していることは、日本語の大きな特徴です。

——私たちは、音や様子などを感覚的に表した言葉を、敏感に聞き分けられているというのでしょうか。

音の響きを感じする力が磨かれている、といえるかもしれませんね。小さな頃から、オノマトペという音楽的効果をもつ言葉に囲まれて育つわけですから。

以前、二歳ぐらいの子を対象に、こんな実験をしたことがあります。まず、子どもに、人が歩いているところを見せます。一方は、さつさと歩き、もう一方は、ドタバタと歩いているところ。「ドタバタ歩く」はどっち？」と尋ねると、多くの子が、正しく、ドタバタ歩いていたほうを指しました。二歳の子でも、音の響きを様子と結び付けることができるというわけです。

そもそも、音調やリズムなどといった、

音楽的な刺激を受け取る感覚器は、胎児期のごく初期の段階で発達します。受胎して十八週頃には、手足を動かす運動野とともに、聴覚神経系が機能し始め、耳が働くようになります。私たちは、お母さんのおなかの中にいるときから、音を聞いているんですね。そんな時期からずっと、日本語を耳にしているのですから、音の響きとそれが表す様子を、直感的に結び付けて聞く力にたけていると考えられます。

想像するって、 どういうこと？

——小さな頃から気づかないうちに、聞いて想像することを繰り返してきているのですね。

そうですね。ここで、想像するということについて、少し詳しくお話ししましょう。想像とは、目の前にある情報から、そこにはない部分を思い描くことです。このと

き、目の前の出来事や言葉から類推を働かせ、連想される経験を記憶の中から引っ張り出して複合し、脈絡をつける——そういう作用が私たちの脳内では起こっているんです。経験、つまり、自分の五官（感覚器官）を使った体験と、人から聞いた本で知ったりした疑似体験が、想像するときの材料となるわけですね。ですから、経験が豊かであればあるほど、作り出すイメージは豊かになります。

——その想像の材料には、それまでに出会った物語によって、感じたり考えたりしたことも含まれますか。

もちろん、そうやって獲得した知識も想像の材料となります。読書や読み聞かせを聞くことを重ねればそれだけ、想像力は豊かになっていくということです。

一方で、想像するときに欠かせない「類推の力」を養うことも大切です。そのためには、「類推を働かせて想像する」という行為を繰り返していくことです。

当然、これは読書によって身につくものですね。ただ、ここで一つ、踏まえておきたいことがあります。それは、「文字を読む」というそのこと自体、子どもにとっては負担が大きいものだ、ということ。読んで想像するには、文字を処理することと、類推

を働かせることという、二つの作業を同時にこなさなければなりません。情報処理の容量が小さい子どもにとって、これは大変なことなんです。

その点「聞く」とは、乳幼児期からずっと慣れ親しんできたこと。類推を働かせるためのトレーニングとして、聞いて想像することを取り入れるというのは、子どもたちの負担を軽減する、よい手立てだと思います。トレーニングが必要なのは、低学年に限ったことではありません。読み聞かせを聞く時間は、高学年になっても大切にしたいと、私は考えています。

高学年でも 読み聞かせを

——読み聞かせは、高学年の子どもたちにとっても意味があることなのですね。

そう。それは、子どもの認知発達という点からいえることなんです。九歳の終わり頃、ちょうど高学年に差しかかる時期ですね。第三次認知革命と私が呼ぶ変化が起こり、抽象的な思考が可能となります。これにより、意思の力、判断力、モラルや情緒が育ってきます。

言語を対象化して捉える「メタ言語意識」

楽しい経験です。それは、読み聞かせや朗読には、読み手の解釈によって表現される、抑揚や音調、リズムなどといった、韻律（プロソディー）が含まれているからだと考えられます。

四歳と五歳の子を対象にした実験があります。ある絵本を、抑揚やリズムをつけて読んだときと、抑揚やリズムはつけず、速さは同じまま一本調子に読んだときとで、内容理解がどのように違うかを調べた実験です。結果、話の内容を正確に理解するという点では、大きな差は見られませんでした。しかし、主人公の心情を理解するという点では、抑揚やリズムがあるものを聞いた子のほうが、得点が高かったのです。

——読み手の声に含まれる抑揚やリズムも、想像に役立っているのですね。

韻律などの音に関わるものは感性に働きかけるということでしょうね。これは幼児の実験ですが、もちろん大人でも同じこと



イラスト：田上千晶

が強くなるのもこの時期です。言葉の意味や働きについて、客観的に考えることができるようになります。例えば、「ゴーゴー」と山を揺すって、風が吹いてきた」という表現に出会ったとき、「なぜピューピューではないのかな」「ゴーゴーというのは、次から次へと風が吹いてくる感じを表しているのかな」と考える。言葉を分析的に捉えられるようになってくるんです。

——その言葉が使われている意味にも目を向けるようになる、ということでしょう。

そういつていいでしょう。そして、このことが、想像力にさらに磨きをかけます。メタ言語意識によってより深く考えたことをもとにして、より豊かなイメージが生まれるのです。この二つは、行ったり来たりしながら高まっていくといえます。

だと思えます。読み聞かせてもらおうと、聞いたことを直感的に意味に結び付けたり、心情を踏まえて共感的に理解したりしやすい。きっと、誰かに読んでもらって聞くと、物語の世界により浸れると感じる人は多いのではないのでしょうか。

子どもたちには、折に触れ、読み聞かせの楽しい経験を重ねてもらいたいものです。そして、そのとき大切なのは、抑揚やリズム、間を意識して、語りかけるように読み聞かせるということ。子どもたちは、きくと真剣に、耳を澄まして聞くはずですよ。

聞くことで、浸れる

——読んでくれる人の読み方しだいで、感じるものが違ってきそうなのも、読み聞かせのおもしろいところだと思います。

誰かに物語を読み聞かせてもらうことは、お話の世界に浸れるという意味で、とても

乳幼児期から親しんできた「聞く」こと。
想像力を養うために、
ぜひ取り入れたいですね。



うちだ・のぶこ

群馬県生まれ。お茶の水女子大学名誉教授、十文字学園女子大学理事・特任教授。学術博士。専門は、発達心理学、認知心理学。文化庁国語審議会委員をはじめ、政府・学会関係の要職を務める。著書に『想像力—創造の泉をさぐる』（講談社）など、共著書に『佐藤学 内田伸子 大津由紀雄が語る 言葉の学び、英語の学び』（ラボ教育センター）など。光村図書小学校「国語」教科書編集委員。



語られ、耳で聞かれてきた文芸

口承文芸学者
小澤俊夫

昔話は口伝えの文芸であるといわれますが、口伝えとは耳で聞かれてきたということです。この事実が大切で、私たちはこれから、二つのことを学ぶことができます。

耳で聞きやすい

第一は、昔話は、耳で聞いて分かりやすい、シンプルでクリヤーな文体を獲得してきたということです。ここが、目で読むために書かれた創作文学と違うところです。子どもたちに昔話を読み聞かせるときには、なるべくシンプルな文章のものを選んでください。昔話は、出来事を速いテンポで語っていくものであって、風景や人物の気持ちを感情移入的に、詳しく語るものではありません。

そして、同じ場面は同じ言葉で語るものです。子どもにとっては、同じものにまた出会うのは、とてもうれしいことです。子どもは同じお話を何回も聞かせてくれと言

うし、同じ絵本を何回も見たりします。これは、子どもの魂の安定した成長にとって大切なことで、昔話はそれを知っていて、同じ言葉を繰り返すのです。

昔話はまた、話のリズムを大事にします。特に、出来事を三回繰り返すことを好みます。その典型的な例が、グリム童話の「白雪姫」です。白雪姫は、悪い女王によって三回殺されます。最初は紐で、二回目はきれいな毒の櫛で、三回目は毒のリンゴで。グリム兄弟はこの三回の出来事をほとんど同じ言葉で繰り返しています。そして、生き返らない三回目がいちばん重要で、そこにアクセントが置かれているといえます。つまり、「タン、タン、タン」というリズムなのです。子どもが耳で聞くと、このリズムの楽しさも一緒に感じてもらいたいと思います。昔話は耳で聞く文芸なので、音楽ときわめて似た性質をもっているのです。音楽では、この形をバーフォームと呼びます。

昔話は時に残酷な場面を語りますが、決して残酷には語りません。「馬方やまんば」という話では、馬の脚が切られますが、決して血が流れたとは語られず、馬は平気で駆けていきます。「手なし娘」では娘が両手を切り落とされて追い出されますが、血が流れたとは語られず、娘は子どもを背負って平気で歩いていきます。そして、子どもが水に落ちそうになると、あつという間に娘の両手は回復し、子どもを抱き留め、また平気で歩いていきます。決してリアルに、血なまぐさくは語らず、まるで切り紙細工のように語るのが昔話です。

そして残酷な出来事は、主人公が最後に幸せに至るための途中の訓練なのです。子どもはお話を聞いたり読んだりするとき、自分を主人公と重ね合わせてお話を体験していきます。そういう子どもにとって、途中で怖いことがあっても、主人公が話の最後で幸せになれば、それで満足なのです。では、その幸せとは何か。広くいろいろ

な民族の昔話について調べたことがあります。が、共通しているのは、まず主人公の身の安全です。そして富の獲得。第三に結婚です。それらが結合している場合もあります。

生の声の魅力

耳で聞かれてきたという事実から私たちが学ぶことのできる第二は、語ってくれる大人のごく近くにいた幼い聞き手は、安心感を持ち、その人に愛されているという実感をもつことができたということです。語ってくれる大人の生の声にも支えられたことでしょう。体温が感じられるほど近くにいることと、生の声の魅力が大切なのです。近頃はテレビがあり、DVDがあり、スマートフォンがあつて、子どもたちの耳に機械を通した声で物語が届けられることが多いでしょうが、本当に大切なのは人間の生の声です。親をはじめ自分の身の回りにいる、大人の生の声が子どもの成長を支えているのだと思います。

昔話も、ぜひ生の声で聞かせてやってもらいたいと思います。子どもがお話を読んでもみんなで聞くのもいいでしょうし、先生が読んでみんなで聞くのもいいでしょう。

昔の学校では、雨で体育ができないと、先生がお話を読んでもくれることがありました。それは子どもにとって大きな喜びでした。子どもはお話を言葉で聞きながら、登場人物や場面を頭の中で描いてみえています。つまり、言葉から絵への変換をしているわけです。その変換する力を養うことが大切だと思います。この創造的な想像力は、生きていくうえであらゆる場合に必要な力です。この力を養うには、ただただお話をたくさん聞くことが必要です。相手の話を集中して聞けること、これはあらゆる学力の基礎であることは自明です。

ただ私は、学力をつけるためにお話を聞かせてください、とは言いたくありません。何よりもまず、子どもがお話を楽しんで聞くことが大切だからです。そして、昔話は聞いて楽しめる文体なので、そういう本を選んでやってほしいし、先生が生で読んでやってほしいと思うのです。

本になっっている昔話は、ほとんどが共通語で書かれていると思いますが、先生が、その土地の日常の言葉（いわゆる方言）に直して読んで聞かせたら、なおすばらしいと思います。昔話は本来、それぞれの土地で、その土地の日常の言葉で語り伝えられてきたのですから。ただし、わざと作った

「方言みたいな言葉」はやめましょう。本当のその土地の言葉は、どの子どもにとっても、自分が育った土地の風景や水や空気と同じものなのです。昔話は私たちの祖先が、何百年も口伝えしてきた伝承文化財です。私たちはその伝承の途中にいるのです。だから、なるべく壊さないでこれからの世代に伝える責任があると思うのです。自然や水や空気を守るのと同じように。

おざわ・としお

中国長春生まれ。口承文芸学者。筑波大学名誉教授。グリム童話の研究から出発し、マックス・リュティの口承文芸理論を日本に紹介。その後、日本の昔話の分析的研究を行い、昔話全般の研究を進めている。1998年、独自の昔話研究と実践、若手研究者の育成を目的として、「小澤昔ばなし研究所」を設立。季刊誌『子どもと昔話』を刊行し、昔話の研究と語りの現場を結び付ける活動続ける。



昔話を楽しもう

横浜市立並木中央小学校教諭

仲元 夕子

使用教材：「まの いい りょうし」（二年下）

1 はじめに

岩手県遠野市で、そこに古くから伝わる話を、語り部^{かたべ}の方から聞いたことがある。話の内容を理解しようと、語られる言葉を集中して聞いたことを覚えている。独特の言い回しや方言など、意味が分からない言葉もあったが、響きそのものがおもしろかった。

学習指導要領（二・二年）の「伝統的な言語文化に関する事項」には、児童が伝統的な言語文化としての古典に出会い、親しんでいく始まりとして、昔話などの読み聞かせを聞くことが示されている。児童はこれまで、絵本やテレビなどを通して、さまざまな昔話と出会っているが、最近では、「一寸法師」などの有名な昔話を知らない子もいる。児童に、いろいろな昔話を知ってほしい、また、私自身が遠野市で体験した「聞いたことを手がかりに想像を広げる」という、昔話のもう一つの楽しみ方を味わってほしいと考えた。そこで、まず、

語り（音声言語）の特徴について考え、これらを生かした実践を試みた。

【音声言語の特徴】

- ①即時消滅性がある。
- ②相手が目の前にいるので、直接的なコミュニケーションを図ることができる。
↓非言語コミュニケーション（身振り・表情）の活用。
- ③難語・同音異義語をなるべく使わないようにする必要がある。

2 指導計画（全二時間）

第一時

- ①教科書P 30・31の四枚の挿絵から、話を想像する。
- ②「まの いい りょうし」の読み聞かせを聞く。
- ③おもしろかったところを出し合う。

第二時

- ①図書室で、昔話の絵本を探して読む。

3 指導の実際（第一時）

■導入——「聞くこと」と関連させる

低学年の「聞くこと」の指導では、知りたいことを明確にして、主体的に聞く力を身につけることが重要となる。児童の聞く目的や意欲を育み、聞く視点を明確にするため、読み聞かせを聞く前に、挿絵から話を想像するという学習活動を位置づけた。

【児童が挿絵から想像した話】

むかしむかし、男の人がいました。男の人は、鉄砲で鳥を撃ち、洋服を作りました。横を見たら、いのししがいてびっくりしました。おしまい。

むかしむかし、あるところに泥棒がいました。泥棒は、たくさん鉄砲を撃って、鳥をつかまえました。そして、今度は死んだいのししを見つけました。いのししを焼いて食べました。めでたし、めでたし。

このように、児童は挿絵から想像を広げ、



教科書にある挿絵を拡大コピーし、黒板に貼って児童に示した。

楽しい話を作っていた。「むかしむかし」から始める、「めでたし、めでたし」で終わるなど、これまで出会ってきた語りの特徴を、無意識のうちに使っていた。さらに、「本当はどんな話なのか」「早く聞きたい」と、教師の読み聞かせをとっても楽しみにしている様子がうかがえた。

■読み聞かせ——音声言語の特徴を生かす

教師が語る言葉から、物語の世界を豊かに想像できるように、次のようなことを意識して読み聞かせをした。

- (1) 独特の言い回しやイントネーションで昔話の世界に引き込む。

本教材は、方言の語り口がおもしろい。「見せっぺ」「なじょして」など、音声独特の表現に気づかせるようにした。語りの参

考として、学習指導書付録CDを活用した。

- (2) 児童の反応を確かめながら語る。

聞き手と直接的なコミュニケーションが図れるという音声言語の特徴を生かし、児童の反応を確かめながら語るようにした。

- (3) 児童の知りたいことに合わせて、強調しながら語る。

読み聞かせを聞く前に、想像を広げて作った話から、児童が本教材のどの点に注目しているのか、どのようなことを知りたいと思っているのかを把握することができ、それをもとに、強弱、抑揚、間の取り方を工夫して読み聞かせをすることで、作った話と関連する部分、本教材のあらすじを捉えるのに重要な部分について、意識させるようにした。

- (4) 挿絵の有効活用によって、音声言語の即時消滅性を補完する。

黒板に貼った挿絵の前に立って読み聞かせをすることで、今、語られている場面がどこなのか、児童が理解できるようにした。「山芋」「あけび」など、分かりづらいつ思われる言葉は、絵を指しながら読むようにし、話の内容がつかめるよう配慮した。

- (5) リズムや響きのおもしろさに気づかせるために、結句を大切にする。
- 一般的に、昔話の最後には、「めでたし、

めでたし。」「とつぴんぱらりのぶう。」などの結句が入っている。本教材の結句「これで、いちご、さけた。」は、児童には耳慣れず、興味をもつと思われた。最後にゆっくり、そつと読むと、児童は初めて聞く言葉に不思議そうな顔をしていた。その後、この結句を何度もまねて言う姿が見られ、リズムや響きのおもしろさを感じていた。

4 おわりに

いつも読み聞かせをしている絵本と違って、本教材は、挿絵だけを手がかりにして内容を理解するのは難しい。話の内容をつかむために、児童は、教師が語る言葉をしっかりと聞く必要があった。読み聞かせのときの表情から、児童が、挿絵や教師を見ながら、集中して聞いていることが分かった。「百一つあんは、鉄砲を一発しか撃っていないのに、いろんなものを手に入れたのかあ」「いのししを焼いたと思っていたけど、山芋だったんだね」などという感想の言葉には、聞く目的をもった主体的な聞き手としての姿が表れていた。音声言語の特徴を生かした指導は、低学年から行うことが大切である。読み聞かせの教材こそ、その特徴を生かすことができるのである。

みんなで昔話を語ろうよ

使用教材：「雪女」（五年）

昭和女子大学附属昭和小学校 教諭
工藤 豪

1 はじめに

■昔話に親しみをもたせるために

児童が、昔話についてどのくらい知っているのかを調べてみた。「桃太郎」を知っている児童は100%、「浦島太郎」は90%、「金太郎」は65%、「鶴の恩返し」「かちかち山」「花咲か爺」「こぶとり爺」などは20%だった。加えて、いくつかの昔話を混同していたり、話の結末を曖昧にしか覚えていなかったりする児童が数多くいた。

本単元では、昔話を聞いて場面を想像することで、昔話に親しみをもたせたいと考え、教師が聞き手の目を見て話す「語り聞かせ」の手法を取り入れることにした。語り聞かせの魅力は、言葉を通して、語り手と聞き手の心の通い合いができることにある。この魅力を最大限に生かし、聞いて想像する楽しさや大切さを伝えたいと考えた。

■年間を通した本学級の取り組み

本学級では、「私のお話」という記録ノートに自分の作った話を書く活動を、年間の

童の想像が広がるように工夫した。

【用意した台本の冒頭部分】

昔、白馬岳という険しい山の麓に、茂作、箕吉という、親子の獵師が住んでおった。

木々の色も鮮やかになった秋の日のこと、茂作と箕吉は、連れ立って山へ獵に出かけた。

「しっかし箕吉、今日は全く獲物が捕れねえなあ」

「おっとさま、こつちだ、こつちだ、獲物だ。次は逃さねえ」

焦って獣を追ううちに、ずつんと山深く入り込んでしまった。

（傍線は台本のために加えた部分）

(2) イメージを文章と絵で整理する

語り聞かせを聞く前に、雪女について想像することで、昔話「雪女」への期待感が生まれ、児童をより物語に引き込むことができる。頭の中に、紙芝居のように絵を思い浮かべながら聞くとよいことを助言してから、語り聞かせを行った。児童が想像した雪女のイメージの変化から、語り聞かせを聞き、雪女の優しさや人間らしいところが、雪女が増えたことが分かる。

2 指導計画（全三時間）

第一時 想像しながら聞く

①雪女という言葉から想像する人物像を、文章と絵で表現する。

②「雪女」の語り聞かせを聞く。

③語り聞かせを聞いた後、教科書P162・163の絵を見て、雪女について想像したことを、文章と絵で表現する。

第二時 「雪女」から想像を膨らませて話を作る

【児童が想像した雪女のイメージ】

▼語り聞かせを聞く前

・とても美人だけど、襲うときの顔はものすごく怖い。

・雪のように心が冷たい人で、背が高くて細く、くやせ細っている。

・絶対に笑顔を見せず、口から冷たい息を吐く。

▼語り聞かせを聞いた後

・怖いけど、優しいところもある。

・最後に助けてくれるということ、そこまで悪い人ではない。

第三時 「雪女」から想像を膨らませて話を作る

「雪女」の世界をより豊かに想像させるための手立てとして、自分が作った話を書く活動を取り入れた。語り聞かせで聞いた「雪女」の話から想像を膨らませ、この話の前後にどんなことが起こりそうか思い浮かべたり、話の中の出来事をより詳しく思い浮かべたりして、作った話をノートに書かせる。

日常の活動により、児童は、このような創作を書くことに慣れ親しんでいる。教

3 指導の実際

第一時（想像しながら聞く）

(1) 語り聞かせにあたって

本来、語り聞かせは、語り手が覚えた話を自分の言葉で語っていくものだが、本単元では、聞き手が想像しやすいように、大きな場面ごとに文章を考えて台本を用意し、それをもとに語ることにした。より躍動感が増すように、山の雰囲気、人物の息づかいなどに関わる表現を加えた。

問や話す速さは、聞き手の反応を見ながら変えていく。余韻を残したいところは、ひと呼吸おいて語る、緊迫感を出したいところでは少し速く語るといったように、児童

師からは、初めに季節や場所、出来事などの設定を考え、文章の長さを決めた後に書き始めるよう指示した。

児童の作った話には、箕吉のその後・雪女誕生の秘密・雪女の子どもの成長に関わる話などがあつたが、雪女の人間性を感じ内容のものが多かった。

【児童の作例（一部）】（「箕吉のその後」）

ある雪の降る夜のこと、箕吉は子どもたちを寝かせ、うとうとしていた。扉の隙間から冷たい風が吹いたかと思うと、目の前にあの雪女が立っていた。箕吉は突然のことでも動かずに、声も出さず、雪女は子どもたちと風のように消えてしまった。次の日、箕吉は必死で子どもたちを探した。

4 おわりに

昔話の語り聞かせ・読み聞かせをするときには、昔話の中にある「人間のあるべき姿」を伝えたい。昔話を通して、生きていくうえでの考え方を知ることができれば、児童にとって、将来への大きな財産となることだろう。

昔話の読み聞かせ

Q & A

岡山ストーリーテリング研究会代表
ついでこ
筒井悦子

「まの いい りょうし」（二年下）の作者の一人であり、
長年、昔話の語りの活動をされている筒井悦子さんに、指導のポイントをお聞きしました。

Q 昔話の読み方に自信がありません。朗読CDなどを使ってもよいのでしょうか。

A 少々間違ってもかまいません。先生自身が楽しむ気持ちをもち、心を込めて読みましょう。

昔話は、語ることで残ってきたものですから、特定の作者はいません。同じ話でも、語る人や地域によって、言葉や言い回し、エピソードの違いがあるものです。読み方が少々違ったり、アクセントが自分流だったりしてもかまいません。ただ、創作ものと違って、昔話には、昔話としての様式がありますから、それを勝手に壊さないということは心がけましょう。

CDは、何度聞いても毎回同じことの繰り返しで、これは昔話を楽しむことにはつながりにくいと思います。何度も聞けば覚

えるかもしれませんが、心の籠もらない暗記になってしまいます。先生は、児童にとって何よりも身近な存在です。その先生の声と気持ちで読んでいただくのが一番です。読み手と聞き手の心が通じ合えるのも、昔話の読み聞かせのよさなのです。

そして、大切なのは、先生が、児童と一緒に楽しむという気持ちをもつことです。そのためには、あらかじめ、自分で繰り返し素直に声に出して読み、人物像や情景を思い浮かべるようにし、そのイメージをもって、児童に読んであげることです。そうすれば、少々分りにくい言葉があっても、児童は、情景や人物像を思い浮かべることができるでしょう。

学年に応じて読み方を変える必要は、特にありません。ただ、昔話には、方言の多いもの、共通語のものなどがあります。方言に慣れない地域の児童に、方言の多い

Q 教師が読んで聞かせた後に、どんな学習が考えられるのでしょうか。

A 同じ昔話を今度は自分で読む、読書と関連づけて別の昔話を読むなど、学習を広げることができます。

先生に読んでもらって楽しんだ後、児童は、自分でも読んでみたくなるものです。声に出すと、日常とは違う言葉のおもしろさや響き、繰り返しなどが、いっそうよく分かり、目で読むのとは全く違う楽しさを感じ取れます。また、創作や説明文を読んだときよりも、読み手による違いが出るので、一人一部分ずつでも読み、互いに聞き合うことも楽しいでしょう。

教科書にある昔話と題名は同じでも、話の展開や出来事などが少し違う昔話もある



Q 教科書は、どのように活用したらよいのでしょうか。

A まずは付録にある本文を聞いて楽しみ、それから挿絵を使って感想を交流するという活用が考えられます。

伝統的な言語文化に触れるという点から、まずは、「聞いて楽しむ」ことを大切にしたい。でもええたらと思います。日本の昔話には、

ります。例えば、「まの いい りょうし」では、出てくる獲物が違う話もあります。「三まいのおふだ」では、最後に火事が出るという話もあります。

教科書と違う話を知っている児童がいれば、それをみんなに話してもらうのもよいでしょう。教科書と違う原話を再話した絵本や昔話集を、図書館で借りてきて読むことも考えられます。教科書での学習を読書につなげるという点でも、昔話はよい材料になるはずです。

ついでこ

山形県生まれ。岡山大学卒業。1974年より岡山で家庭文庫「草の美文庫」をひらき、子どもに昔話などを語り始める。そのかたわら、地域の数々の教育活動・図書館活動に携わる。著書に『子どもに語る 日本の昔話1～3』（こぐま社）、『昔話とその周辺（一）～（五）』（私家版）などがある。





◀図1：教科書P 26の挿絵を表示したデジタル教科書の画面。



▲図2：図1の挿絵を、くまさんを中心にして部分拡大した画面。移動ツールを使って拡大部分を動かしながら、くまさんから袋へと子どもたちの視点を移動させた。

挿絵を拡大して読みを深める

デジタル教科書を使いこなそう

1

金沢星稜大学 教授 佐藤幸江

活用が広がる「国語デジタル教科書」。しかし、それをただ提示するだけでは、子どもたちに学びをもたらすことにはなりません。本連載では、事例をもとに、デジタル教科書の効果的な活用のしかたについて考えてみます。今回は、挿絵を拡大提示して読みを深める手立てに着目します。

1 挿絵を拡大提示する手立て

文章の読みを深めるために、大きくした挿絵を見せる手立てでは、従来の国語の授業でも行われてきたものです。教師が手描きで準備した大きな挿絵を黒板に掲示しながら、学習を展開する様子がよく見られました。では、デジタル教科書を使えば、従来とは違う学習効果が得られるのでしょうか。

以前、一年一学期の物語教材「はなのみち」で、『はなの みち』の劇遊びをしよう」という単元を実践したことがあります。デジタル教科書で拡大提示した挿絵を使いながら想像を広げて文章を読み、それをもとに簡単な劇遊びをするという学習です。今回は、この実践をご紹介します。

2 単元の指導目標

◎場面の様子について、登場人物の行動を中心に想像を広げながら読むことができる。（読む(1)ウ）

○語のまとまりや言葉の響きなどに気をつけて音読することができる。（読む(1)ア）

3 単元の指導計画（全六時間）

▼第一時

「はなの みち」の範読を聞き、挿絵を手がかりにして、話の大体をつかむ。

▼第二～六時
動物たちの様子や会話を想像して、簡単な劇遊びをする。

ここで活用！

目に入る情報を絞るという方法が有効です。

子どもたちは、次のように、くまさんと袋の関係を言語化していきます。

「くまさん、不思議そうな顔をしている」「何だろうって、思っているんだよ」

その後も、挿絵の部分拡大によって、物語とともに変化していく、くまさんの表情にもしっかりと気づき、様子について豊かに想像を広げることができました。

発言が落ち着き、「他のところも見たい」と言う子が出てきたら、元の表示に戻した挿絵を提示します。子どもたちは、新たなことに気づき、また発言が続くようになります。

(2)挿絵を叙述と対応させてイメージ化

一年生の子どもたちはよく、「これ」あれ」と、指示語を使って話をします。特に一学期のこの時期は、語彙が十分でないため、指示語の内容を言葉で表すというハードルは高くなります。ですから、電子黒板の画面上で、挿絵に印を付けたり本文に線を引いたりさせ、視覚的な表現とともに話をさせることは、大きな助けとなります。

電子黒板のところに来て、画面に印を付け、みんなから「へえ」「そうかあ」という反応をもらうだけで、満ち足りた気分になる子が多いのもこの時期の特徴です。それはまた、「自分もやりたい」という他の子の意欲を生み、授業の活性化につながります。

授業では、くまさんの家にあるストーブを指し、「火がついている」と話した子がいました。すぐにその部分を拡大し、みんなで確認しました。自分の目で確かめることで納得が生まれます。季節が冬

4 活用のポイント

(1)挿絵から読み取ったことを言語化

第二時には、教科書P 26の挿絵から、くまさんが何をしているのかを想像して言語化する学習活動を設定しました。教師は、「ここは、くまさんのおうちですね。中の様子を見てみましょう」と言いつて、電子黒板で、デジタル教科書の挿絵を提示しました。かわいくくまさんの挿絵（図1）が大きく映されるだけで、教室は大騒ぎです。

「あつ。くまさん、袋を持っているよ！」。そんな声が聞こえたら、しめたものです。すぐに挿絵を部分拡大し、くまさんの情報だけが画面に映るようにしました（図2）。話題を焦点化したとき

には、このように、 unnecessaryなものを隠し、であると押さえることも、この場面では重要です。

その後の学習でも、挿絵を部分拡大したり動かしたり、第二場面と第四場面の挿絵を比較したりしながら、場面の様子への想像を深めていきました。

5 実践から分かること

挿絵の拡大提示により、挿絵から分かったことと叙述を引き合わせながら想像を広げる、という言語活動がより活発に展開できたように思います。

高学年では、挿絵など使わないとお考えの先生もおられるかもしれませんが、高学年でも、それに適した挿絵の活用が考えられます。例えば、六年「やまなし」では、挿絵をもとに、五月と十二月、昼と夜の違いや、谷川の深さなどを想像させることができます。私の経験では、これにより、「わけが分からない」と、教材と距離を置いていた子が、関心を示すようになりました。

デジタル教科書を活用して、これまで以上に、挿絵に描かれている情報を読むことに生かしたり、挿絵と文章とを関連させたりする授業に取り組んでみてはいかがでしょうか。



東京都生まれ。横浜国立大学大学院教育学研究科修了。横浜市内の公立小学校教諭、主幹教諭を経て、現職。専門分野は、教育工学（授業設計、情報教育）、教科教育法。共著書に『タブレット端末で表現する協働的な学び』（フォーラムA）など。

書写指導は、ねらいを絞って

広島県尾道市立向東小学校 教頭 藤井浩治



広島県生まれ。2008年度まで広島県尾道市立土堂小学校に勤務。陰山英男校長在籍の3年間、教務主任として土堂改革に取り組み、数々の成果を上げる。光村図書 小学校・中学校「書写」教科書編集委員を務める。

限られた時間の中で、書写の基礎・基本をしつかり指導するためには、学習要素を焦点化することが重要です。これはまた、子どもたちに、書写への苦手意識を抱かせないためにも大切なことです。ねらいを絞った指導のあり方について、具体的な授業例をもとにご紹介します。

1 課題文字への意識

私が、書写の授業中に決して言わないように気をつけていること、それは「教科書の文字とそっくり同じように書きましょう」という言葉です。体育の水泳の授業で、オリンピック選手が泳ぐ映像を見せて、「これとそっくり同じように泳ぎなさい」と指示したりはしないでしょう。それと同じことです。

その単元で身につけさせたいことを焦点化し、課題文字のどの部分に子どもたちの意識を向けさせるのか、ねらいを絞ることこそ重要なのです。

2 ねらいを絞った授業

① 身につけさせたい力と授業のねらい

それでは、「幸福」という課題文字で「画の長短」について学習する授業を例に説明してみよう。この授業で子どもたちに身につけさせたい力は、「画の長短を意識して文字を書く能力」です。そして、そのためには、「横画が複数ある場合は、そのうち一画だけを長くして、他の横画はほぼ同じ長さにする」という原則を理解する必要があります。

試し書きのとき、ある子が「幸福」を図1のように書きました。「幸」を見ると、

うか」と発問し、考えさせます。それによって、「三本の横画のうち、一本だけを長くする」という原則を自ら発見させることができます。

続けて、図3のような二種類の「三」を提示します。「AとBの字の、どちらがより整っていますか」と発問し、二つの字形を比較させ、Aのほうの字形がより整っていることに気づかせます。このことで、子どもたちは、「長くしない横画は、ほぼ同じ長さにする」という原則にたどり着くことでしょう。自分で「そうだったのか!」と原則を発見するからこそ、納得し、深い理解が生まれるのです。

③ 原則を試し書きに当てはめさせる

「幸福」の「幸」の字は、複数の横画をもちます。ですから、原則を理解したとしても、具体的にはどの一画を長くす

全ての横画がほぼ同じ長さになっています。ここから、この子が「複数の横画は一画だけ長くする」という原則を理解していないことが分かります。「福」の組み立て方も気になるところですが、この授業のねらいは、横画の長さです。それを焦点化するために、教師はここで、ねらい以外のことは触れないように留意します。

② 原則を発見させる

次に教師が考えることは、「複数の横画のうち一画だけを長くする」という原則を子どもたちに発見させるための手立てです。ここで有効なのが、「比較法」

るのがよいかを考える必要があります。そこで、教師は「幸」の字を整えるには、どの横画を長くすればよいでしょう。そして、その他の横画は、どのように書くのがよいでしょうかと投げかけます。すると、「幸」の場合には、上から二番目の横画だけを長くし、その他の横画はほぼ同じ長さに書く」ということに、子どもたちは気づくはずで

その後、自ら発見し、理解した原則を、自分が書いた試し書きに当てはめてみようを促します。このように自己評価をさせることは、横画の長短を意識していなかったこれまでの自分を認識することにつながります。それが、「前はできていなかった。でも、次はもっと整えて書けそうだ」という意欲へと結び付くのです。

④ 原則に気をつけて書かせる

ここで、理解した原則をさらに確かなものにするために、原則を音読させたり、課題文字に原則を書き込ませたりしてみよう。このような音読や書き込みは、書写を苦手とする子どもたちの支援にも有効です。

その後、原則に気をつけて、再度、課題文字を書かせ、今度も、書いた字を原則に当てはめて自己評価をさせます。こ

図1: 試し書き



です。

例えば、図2のような「三」を見せて「三」の「三」をどのように直せば、より整った字になるでしょうか」という発問をします。子どもたちから、「横画の長さを変えたほうがよい」という意見が出たところで、「それでは、三つの画のうち、いくつかの画を長くすればよいでし

図2



図3

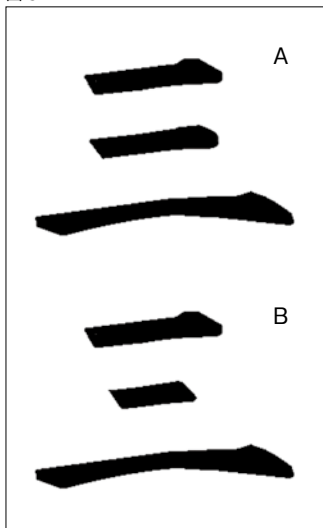


図5：まとめ書き



大きく成長したことが見て取れます。子ども自身、自分の成長に気づき、書写の学習が役に立ったことを実感するでしょう。まさに「幸福」を感じるひとときです。

⑧原則に照らして振り返らせる

グループや全体で、授業の振り返りを行います。数名の子の試し書きとまとめ書きを黒板に掲示し、振り返って考えたことを発表させるのもよいでしょう。教師は、ここでも、ねらいから外れた評価をしないように心がけます。必ず原則に照らして、よくなったこと、できるようになったことを発言させるようにしましょう。

図6



子どもたちから、「『青』は上から三つ目の横画だけを長くして、他は、ほぼ同じ長さにすると整います」「『書』は……」という発言が出たら、図7のような正解のカードを見せます。そして、「横画が複数ある漢字を書くときには、今日学習したことに気をつけましょうね」と、原則を押さえてから授業を終わりたいものです。

図7



ねらいを徹底した、ぶれない授業について述べてきました。書写の授業には、ねらい以外のことを指摘しすぎる傾向があるのではないかと、私は感じています。このことが、子どもたちの、書写への劣等感を生む一因になっているのではないのでしょうか。課題文字と比較し、「ここができていない」という否定の言葉を積み重ねるのではなく、ねらいを焦点化することで「ここができるようになった」という肯定的な評価を積み上げるようにしていきたいと、いつも考えています。

もちろん、ねらい以外のことを全く指導しないわけではありません。既習事項を活用し、文字をさらに整えることも必要な力です。ねらいと同様、既習事項の活用についても、肯定的な評価を積み上げていくことが大切です。

3 否定ではなく肯定を

ここでは、ほとんどの子が、原則に沿って書くことができています。

⑤書写が苦手な子どもに配慮する

子どもたちの技能を定着させるために、練習の時間を取ります。ここで重要なことは、「原則を理解できても、書くときにそれを生かせない」という、書写技能が十分でない子への支援です。このときに助けとなるのが、練習用紙です。

学習指導書の付録CD-ROMには、練習用紙が各種収録されています。これらを活用すれば、「穂先マーク」「骨書き」「かご字」など、いくつかのガイドを組み合わせた練習用紙を作ることができます。

今回の場合、授業のねらいは、横画の長さについての原則を理解することなので、図4のような「骨書き」の練習用紙を使うのが適切でしょう。穂先の向きを意識させたいときには「穂先マーク」の練習用紙、力の入れ方を定着させたいときには「かご字」の練習用紙など、ねらいに応じて使い分けことが重要です。適切に活用することができれば、書写の苦手な子ども、なぞり書きの要領で、原則に沿った字を書くことができ、新たな自信につながります。教室には、子どもたちの笑顔がこぼれます。

図4：「骨書き」の練習用紙の例。学習指導書付録CD-ROMには、このような練習用紙が収録されている。



⑥原則に照らして机間指導をする

子どもたちが練習をしている間、教師は机間指導を行います。このときも、原則に照らした評価の言葉を短く伝えるにとどめるようにします。ここでは、「『幸』の横画を、一画だけ長く書いていて、字形が整っているね」「他の横画をほぼ同じ長さで書いていいね」と、肯定的な評価を繰り返します。「少し細かいから気をつけよう」「もう少し大きく書こう」などと、ねらいから外れた評価を決してしないよう、留意することが重要です。

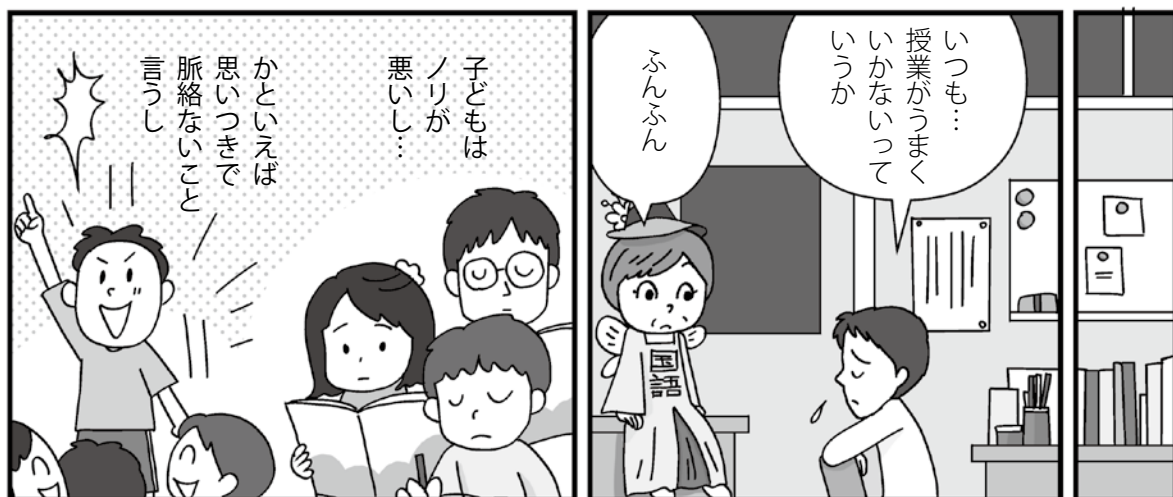
⑦まとめ書きと試し書きを比較させる

原則に留意しながら、まとめ書きをしたら、それを試し書きと比較させます。机の上に二つを並べて置くなどすれば、字形の違いが明確になり、原則に照らして、自分の字がどのように変わったかがはっきりと自覚できます。

図5は、図1を書いた子によるまとめ書きです。「幸」の字に着目すると、「複数ある横画のうち一画だけを長くして、他の横画はほぼ同じ長さにする」という原則を意識して書かれていることがよく分かります。わずか四十五分間の授業で、

こしみず・かおり

広島県生まれ。玉川大学教師教育リサーチセンター客員教授。23年の教員生活の後、港区教育委員会指導主事、東京都教育庁主任指導主事、小学校校長等を経て、現職。光村図書小学校『国語』教科書の編集委員を務める。



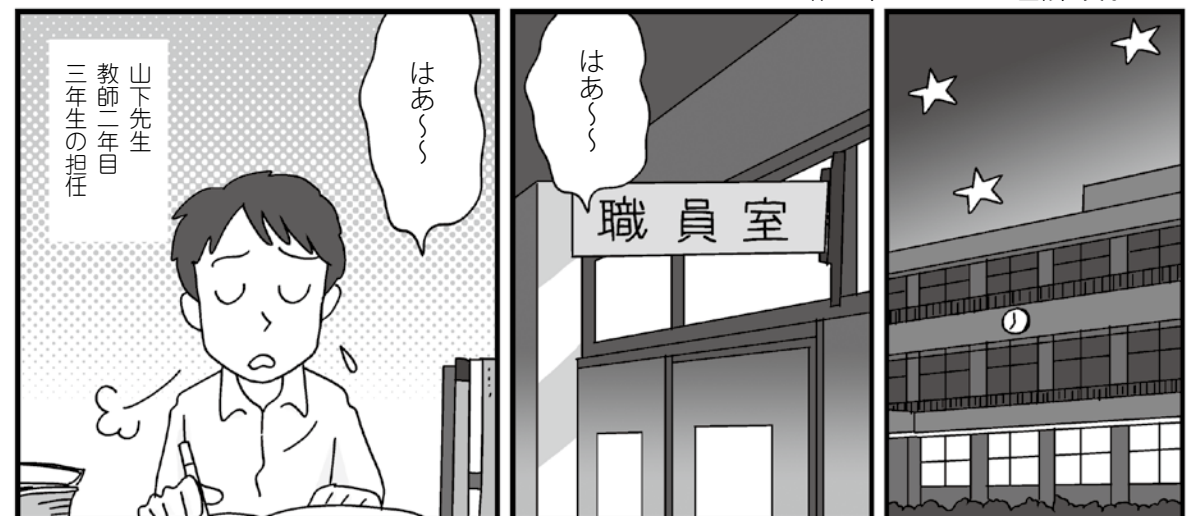
なるほど国語指導

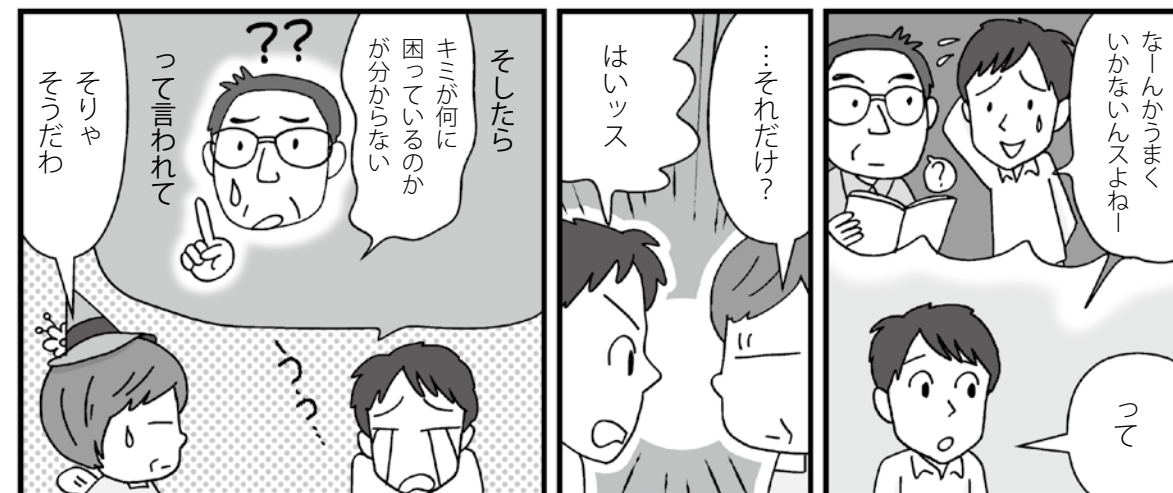
妖精コッシーが教えます 1



「分からない」って言おう!

作・画/あべかよこ 監修/興水かおり





指導の問題点は、具体的な事例から探るのがおすすめ。先輩にとっても「いつか来た道」。
経験上のアドバイスがあるはず。今回は、「国語って何でもあり？」の巻。お楽しみに！（コッシー）

平成27年度「言語教育振興財団」研究助成金一般公募のお知らせ

一般財団法人「言語教育振興財団」では、小・中・高等学校、大学、教育研究団体等を対象とし、今後の情報化・国際化の進展を踏まえ、言語教育（国語教育・外国語教育等）の充実・発展を図るために、理論と実践の分野について優れた研究開発を行う団体または個人に対して助成します。

助成内容	①言語教育の内容・方法に関するもの（教育内容・方法部門） ②言語教育教材の質的向上に関するもの（教材部門） ③教育機器を利用した言語教育の在り方に関するもの（教育機器部門）
研究期間	平成 27 年 4 月～ 28 年 3 月（原則 1 年間）
応募資格	言語教育（国語、英語、日本語等）に関して研究開発を行う教員及び教育開発を行う小・中・高等学校・大学・教育研究団体（学校の学年・教科単位を含む）
助成件数及び金額	助成件数は 50 件まで。 助成金額は 1 件につき 20 万～ 40 万円 （団体の場合は 40 万円まで、個人の場合は 30 万円まで） 研究期間が 2 年にわたる場合は初年度だけの支給となります。
応募方法・締め切り	・所定の申請用紙に記入の上、研究開発活動についての企画書または実施した実践報告書等の参考書類を添えて、平成 26 年 12 月 22 日（月）必着で、当財団事務局に郵送。 ・申請用紙を希望される方は、返信用封筒を同封の上、当財団事務局までお申し込みください。 ・この応募要項については、都道府県教育委員会等推薦の場合も同様に扱います。
決定・発表	当財団「選考委員会」にて選考を行い、選考結果は平成 27 年 2 月末までに文書にて通知します。平成 27 年 3 月末に銀行振り込みで交付します。
問い合わせ先	一般財団法人言語教育振興財団 事務局 〒141-0021 東京都品川区上大崎 2-19-9 TEL 03-3493-7340 FAX 03-3493-2174 E-mail:gengo-k@star.ocn.ne.jp

広報部便り

「聞いて想像する」という切り口から、昔話の読み聞かせについて特集した「昔話を聞いて楽しもう」は、いかがだったでしょうか。提言や実践、Q&Aを通し、昔話の魅力の一つとして、「人の生の声を聞くよさ」が浮かび上がってきたことを興味深く感じます。昔話を聞くととき、聞き手は、その話自体がもつおもしろさやメッセージ

だけでなく、語り手から注がれる温かなまなざしをも感じ取っているということなのでしょう。

さて、今号から、「デジタル教科書を使いこなそう」「なるほど 国語指導」という二つの新連載が始まりました。楽しく読んでも役に立つ。そんな内容を目ざしていきたいと思います。次号も、どうぞお楽しみに。

赤木かん子の学校図書館シリーズ

全国の学校をまわって、魅力的な図書館づくりをされている赤木かん子さんによる、学校図書館づくりのためのシリーズです。図書館のリフォーム・運営・選書は、この三冊にお任せください。



赤木かん子の
読書力アップ!
学校図書館のつくり方
赤木かん子 著
定価 本体2,400円＋税
B5判・並製・128ページ
ISBN 978-4-895528-47-5

赤木かん子の
読書力アップ!
学校図書館のつかい方
赤木かん子 著
定価 本体2,400円＋税
B5判・並製・128ページ
ISBN 978-4-895528-66-8

赤木かん子の
読書力アップ!
学校図書館の本のえらび方
赤木かん子 著
定価 本体2,400円＋税
B5判・並製・144ページ
ISBN 978-4-895528-68-0